



無題



試作品

オツタン

23:00

電車が駅に着いた。

開いたドアから、一人の男が駅に降り立つ。

改札口で駅員さんに挨拶して外に出る。

彼は、「うーん」と、声を出しながら背伸びをして歩き出す。

今日の彼は、いつもより陽気だ。

久しぶりに会社の同僚と仕事帰りに酒を飲んで来ていた。

機嫌良く鼻歌を歌いながら、我が家への歩を進める。

彼の自宅までは、ここから徒歩で約20分。

暫く線路沿いを歩いて踏切を渡ると、街灯が少ない田舎道。

暗い個所が多いので、女性の一人歩きは危険だ。

男でも、ここは余り通りたくない道だ。

少し足がふらつくがゆっくり歩けば大丈夫そうだ。

右の方に最初の民家が有り、ガサッと音がして、

柵越しに、犬が吠えかかってきた。

思わず「わ！！」っと、叫んでしまった。

「確か、ここの家は犬を飼っていなかったよな？

今日から飼いだしたのか？」

番犬として優秀なのか、それとも散歩に連れて行ってもらえないからなのか、
やたら吠えかかる。

吠えられた彼にすればたまったものじゃない。

かなり心臓に悪い。

「きっと腹が減ってストレスが溜まっているんだな。

酷い飼い主だな。ふふふん♪」

胸の動悸が激しいが、自分を落ち着かせるため

訳の判らない歌を歌いながら彼は歩き始めた。

しばらく歩くと気持ちも落ち着いて来た。

やっと2軒目を通りすぎた辺りで
彼は、道端に光る何かを見つけた。

白く光る物体。

「もしかしたらお金か？でも、光り過ぎだよな？
ま、何にしても関わらない方が良いな。」

独り言を言いながら、その場所を通り過ぎようとした時、
突然、光が浮き上がり、傍の黒い柱から人影が出て来た。

暗がりに浮かび上がる白い顔。

「ぎゃーーーーー！！」っと、またもや悲鳴をあげた。

なんと、電柱の陰から出て来た相手も、
彼の叫び声に驚いて腰を抜かし、泣きながら悲鳴を上げていた。

数日経った、前章と同じ田舎道での出来事。

真貝 政雄（仮称）（しんかい まさお：）は、突然降り出した雨の中、ずぶ濡れになりながら我が家を目指して全速疾走していた。

「くそ、傘を持ってない時に、わざわざ雨を降らさなくても良いだろう！！」

空に文句を言いながら、とにかく走る。

この道には、雨宿りできるような、軒の大きな家は無い。

政雄は、勤め先のロッカーに置き傘を入れているのだが会社を出る時は、星空が見えていたので傘を持たずに帰路についた。

携帯の天気予報にも雨マークは入っていなかった。

「軒は小さいけど、休業中の食堂の軒下で雨宿りが出来るかも？」

今は、この土砂降りの中を走るしか方法は無い。

走り続けて、ようやく村に入ったところに有る交差点が見えて来た。

その交差点の角に休業中の店が有る。

雨宿り出来るまで後少し。全身全霊をかけてラストスパート。

嬉しさで思わず口ずさむ

（♪走る。走る。俺達～・・・♪）

後から走って来る車が水溜りの水を勢いよく弾いて行く。

その水をご丁寧に受けてしまった政雄。

腹が立って、「止まれ馬鹿野郎！！」と、大声で叫んだ。

目の前に一台の車が止まった。

運転席の窓が少し開いて、中から男が声をかけて来た。

男：「なんか叫んだな？なんやねん？」

政雄：「水掛けられたから止まれって言うたんや。」

男：「雨で濡れてるのに、水掛かっても一緒違うんか？おお？」

政雄：「人が歩いてるのに、速度落として走ったらどやねん？」

水飛ばさんと走ったら、腐った事、言われんで済むやろ？」

男：「クリーニング代出せってか？お前、俺を舐めてんのか！」

政雄：「いつクリーニング代出せって言うた？掛かったんやから謝れよ」

カチッと音がして、助手席側のドアが開いた。

(喧嘩なら受けてたつ。)

政雄は身構えた。

出て来たのは一本の傘。

助手席男：「兄ちゃん、すまん。急な用事が有って、

こいつ、ちょっと気があせってるんや。この傘で勘弁したってくれへんか？」

男：「金を要求されると思ったんや。ごめんな。勘弁して。」

政雄：「素直に謝ってくれたら文句言わへんよ。

もう傘さしても一緒やけど貰っとくわ。」

男：「すんませんでした。」

言うなり、一気に加速して行く。

助手席のドアは開いたまま・・・

(ファイティングポーズする必要無かったな。)

戦利品？の傘を差した政雄は、思い出し笑いをしながら

意気揚々と、ゆっくりと歩き出した。

(それにしても、助手席の人、怖かったらうな。ドアに手が届いて無かったし。)

交差点で信号待ち。

そこから店の方を見る。駐車場に車が一台止まっている。

男性が二人論中。

政雄は軒下に用が無くなったので、そのまま家に向かって歩いて行った。

大声で叫ぶ男の声を背中に聞きながら・・・(笑)

最近、省エネ対策で自動販売機の照明が消えてる。
昼間は全然気にならないけど、夜に見ると電源が切れてるみたいだ。

杉尾 守（11）は、21時頃風呂から出て冷蔵庫を開けて飲み物を探した。

「無い！！ジュースが無くなって！！お母さん、飲んだ！？」

台所で大声で喚く守の声に母親が気付いて近寄って行く。

母：「うるさい！！何が有ったの？」

守：「有ったら怒らないよ！！ここに入れてたジュースどうしたの？」

母：「そこのだったら、お父さんが酎ハイ作って飲んだよ。

お父さんだって喉乾くんだからいいじゃない。」

守：「僕の小遣いで買ってきたのに――！！」

泣きだした我が子が可哀そうになり、母親がジュース代を手渡す。

母「これで近くの自販機で買っておいで」

守は、すぐに泣きやみ、無言で金を受け取ると、
自動販売機へ走っていった。

家の近くの牛乳屋さんの横に 自販機は有る。

何故か、守は買わずに泣きながら帰って来た。

母：「また泣いてるの？ジュース買わなかったの？」

守：「だって自販機止まったた。」

母：「ええ？あそこのいつも買ってるよ？」

守：「だってだって、電気消えてるのに！！」

（あまりに突拍子もない事を言うので、夜道が怖いので
途中までしか行ってないんだらう。）と、母は思った。

懐中電灯を持って自販機まで二人で行って見た。

確かに照明が消えてる。

光を当てると自販機に何か書いている。

{この自動販売機は、省エネの為、照明を切っています。}

(暗かったからこれが読めなかったんだね。)

母：「お金入れたら出るよ。照明が切れてるだけ。って書いているよ。」

守：「ホントに出るの？」

母：「出るって書いているから、大丈夫。」

守：「入れるね。」

自販機にお金が吸い込まれていく。

ボタンのランプが点いた。

守がジュースのボタンを押した。

・・・出てこない。

売り切れなのかな？

他のボタンを押してみた。

でも出ない。

(ホントに壊れてるのかな？・・・・・・・・・・・・・・・・)

自販機：「どうかしましたか？」

二人：「！！！！」

自販機：「尋ねてるんだから返事してよ！」

自販機がしゃべったので、二人ともその場で震えあがった。

自販機：「お金を入れたんでしょ？物が出なかったんでしょ？

杉尾さん、はっきり言いなさい！！」

自分の名前を言われたから、恐怖倍増。

二人とも、入れたお金を払い戻しもせず、慌てて家に向かって逃げた。

「お————い！！待てよ————！！ジュース欲しいんじゃ無いの！？」

後ろから自販機が大声で叫んでる。

玄関に飛び込み、鍵を掛け、家の電灯を全て消して
無我夢中で布団に入り込む。身体は小刻みに震えている。

守：「お母さん、怖いよ。」

母：「あんたが我がママを言うからでしょ？」

守：「喉乾いてたんだもん。」

母：「もう黙って寝なさい。」

守：「怖くて眠れない。」

その時、ドンドンと玄関を叩く音が聞こえた。

その音はいつまでも続いている。

二人は、更なる恐怖に我を忘れた。

母は、台所から消火器を持ち出し、守は玄関に置いてあるバットを構える。

母が玄関のロックを外した瞬間、いきなり黒い影が入って来た。

大声を出しながら二人で影に襲いかかった。

消火器が鈍い音を立てて敵に命中。

影がフラフラと倒れこむ。

そこへ守のバットが容赦なく影に襲いかかる。

約一時間後、懐中電灯の光を影に当てる。

そこで二人が見た物は・・・・・・・・

ローギアードで、アクセルを目一杯に踏み込み、ブー——と、甲高いエンジンの音を響かせながら、赤い車は峠の道を急ぐ。

運転手の壮太（そうた）は、この峠道を走るのは初めてだった。

彼は、「道幅が狭い上に、坂も急斜面だ。誰がこんな道を造ったんだ？」と、ブツブツネチネチと、文句を言いながら運転する。

もう少しで、坂の頂上だ。と、喜んだ瞬間、愛車のエンジンが止まる。

「え？嘘だろ？なんでだよ？」

壮太は、サイドブレーキを引き、ボンネットの開放レバーを引き、ドアをゆっくり開け外に出て、ボンネットを開ける。

途端に黒い煙が吹き上がる。

「エンジンが焼けたのか？でもラジエターには水がたっぷり入ってるぞ？何でだよ。」と、壮太は、愛車のエンジンを見つめて文句を言う。

「オイルか？」と、思い、オイルゲージで調べる。

「違うな。オイルは黒いけど、MAXまで入ってるな。」

自分で見られる部分には何も問題は無い。

まだ熱い熱気がエンジンから出ている。

「まあ、焦らずにエンジンが冷めるまで、ボンネットを開けておこう。」と、言って、開けたまま、坂の頂上まで歩き、景色を眺める。

流石に山奥だから、民家も無いし街も見える訳が無い。

「山間の景色にしてはもう一つだな。残念ながら街の夜景も見えないし。」と、言って、自分の愛車を止めている場所へ戻る。

涼しい風を受けたエンジンは、完全に冷めて手で触れられる様になっていた。

「ちょっとだけ動かしてみようかな？」

壮太は、ボンネットを開けた状態でキーを回してみる。

ブオオオンっと、真っ黒な排気ガスを噴出しながら、エンジンが元気良く動いた。

「なんだ。車も休憩したかったんだな。」と、苦笑しながら、ボンネットを閉めに外に出る壮太。ガン！と音が鳴ってボンネットが閉まる。

壮太は、車に乗り込み、「さあ、エンジン全開で行こうか。」と、アクセルをゆっくり踏み込んでいく。

坂の頂上に達し、エンジンの音が緩やかになる。

「経験上、ここから下り坂になるはずだよな？下り坂ならエンジンに負担はかからないはずだ。」と、言って、のんびりと車を走らせる壮太。

平坦な道が続いていたが、少しずつ下り坂になって来たのか、車に加速がついてきた。

「ここはローギアードに入れて、エンジnbrakeで下ろう。」と、思い、トップからローにシフトチェンジする。

でも、それでもグングン加速していく愛車。

「これじゃ、まるでスキーの直滑降じゃないか。この道を造った人の設計ミスだろ。」と、また、ブツブツと文句を言い出す。

「こんな状態で前から車が来たら避けられないぞ。間違いなく事故るぞ。」と、言いながら、前方に全神経を集中させる。

何気に視野に入ったルームミラーを見た壮太は、目が点になった。

いつの間にか真後ろに車が接近している。

さっきまで後ろに車なんて走っていなかったのに・・・

「まさか、追い抜こうってんじゃないよな？こんな所で事故はごめんだよ。」と、壮太はポンピングブレーキで、後ろの車の運転手に警告する。

「分かってくれよ。」と、壮太は祈りながらハンドルを操作する。

目の前にカーブが見えてきた。

「こんな急な坂で急カーブ!？」

プァァァァァァ・・・

カーブに差し掛かる直前、クラクションを大音響で鳴らしながら、後ろの車が追い越しをかけてきた。

壮太は、思いっきりブレーキを踏み込み、相手を先に行かせる。

追い越して行った車は急カーブを物凄いスピードで曲がって行く。

と、思ったら、その車は目の前でタイヤから白煙が吹き出る程の急ブレーキをかけた。

「うわあああああ・・・」

壮太の運命や如何に!？

後の想像は、読者の皆様にお任せ致します。

オットン

朝10時。

広島のカス工事会社に勤める沢野 秀也（さわの しゅうや）（24歳）は、24時間の勤務から開放され、溜息を吐きながらアパートに戻って来た。

「まさかユンボ（油圧式パワーショベル）で既存のカスパ管を引っ掻いて、カス漏れさせるなんて・・・普通は、硬い土だけ機械で掘って、後は手掘りで掘るだろうが・・・それを・・・」
工事責任者として現場で指示をしていた秀也は、現場から本部に戻ると、当直係長に現場で起こった事を全て話し、「今日の失敗は、責任者である私の指示ミスです。現場作業員に落ち度はございません。どうか、彼らにご配慮を頂きます様、よろしくお願い申し上げます。」と、言って、自分の進退伺いを提出して帰路に着いた。

アパートに着く少し前に、筆頭係長から連絡が有り、「お前の判断ミスで、どれだけのご家庭に迷惑をかけたと思っているんだ！！本当は直ぐに会議を開きたいが、迷惑をかけた皆様に、頭を下げに行かなきゃならんから人が集まらん。君の処分が決まるまで会社に出てくるな！！」と、一方的に怒鳴られ電話を切られた。

その言葉が耳から離れない。

「仕方ない。処分を望んだのは僕だし。」と、言って、部屋の中の荷物を固める。

秀也は1箇所に集めた荷物（と、言っても、デイバッグ1つと、ボストンバッグ1つと、スーツ1式）を、車のラゲッジルームに入れ、アパートの管理人室に行く。

管理人は、アパートへの来客の出入りには異常な程厳しいが、住人には優しい。

「管理人さん、僕は暫く留守にします。誰かが僕を訪ねて来たら、この電話番号に連絡をする様に伝えて下さい。」と、言って、管理人にメモを手渡す。

「ちゃんところへ戻って来るんだろ？」と、管理人が秀也に聞く。

秀也は、「勿論。」と、笑顔で返事を返す。

それを聞いた管理人は、「気をつけて行っておいで。あんたからは10年分の家賃を先貰いしてるからな。帰って来ないと、日本全国に搜索依頼を出すぞ。」と、いかつい笑顔を見せる。

「大丈夫ですよ。管理人さんが待っててくれるんだから、必ず戻って来ますよ。」と、言って、管理人室を後にする。

秀也は、溜息を吐き、「久しぶりに自宅の風呂に入るか。」と、独り言を言って愛車に乗り込みキーを回す。

ボンネットから、“ボッポボボ・・・”と、音を出して愛車のエンジンが回る。

秀也は、「久々に動いたから嬉しいだろ？」と、車に話しかけ、ゆっくりとアクセルを踏み込んで行く。

秀也の愛車は、“ドドドドド・・・”と、いう排気音を奏でながら、駐車場から道路に出て行く。

それを優しく見つめる管理人。

彼は、「幾ら儂に笑顔を見せても、あんたがそれに乗る時は、心の中が乱れている時じゃ。気晴らしに行ってくる。お前さんの部屋には何人たりとも近づけさせんよ。」と、秀也の車のテールランプ

に向かって話しかける。

管理人の思いを知ってか知らずか、秀也は、「さあ、行こうか。相棒。」と、愛車に声を掛け、更にアクセルを踏み込んで行く。

命を吹き込まれた愛車は、“グォー————・・・”と、まるでジェット戦闘機のような爆音を上げて、アパートから離れて行く。

あけぼの通りに出た時、秀也が、「取りあえず、自宅に荷物を起きに行こうな。」と、車に話す。車は、まるで返事をするかの様に、“グオン”と唸り、更に加速して行く。

あけぼの通りから、矢賀新町5丁目東の交差点を左に折れ、高速道路府中入り口から広島高速2号線に入って行く。

左手に建っているイオンモールを見ながら、「あそこで夕食の買い物すれば良かったかな？」と、苦笑いをしながら、アクセルを踏み込んでいく。

「調子に乗ると検問に引っかかるからな。余り飛ばすなよ？」と、車に注意を促す秀也。鼻歌を歌いながら運転する秀也と、軽快に飛ばしていく愛車。

温品JCTを抜けると広島高速2号線から広島高速1号線に入っていく。

更に進むと、山陽自動車道の広島東ICに入って行く。

「お前、早過ぎ。もう少し速度落とせ。」と、愛車に言いつつ、アクセルを緩める秀也。ICを大阪方面行きに進路を取る。

「そう言えば、自宅に帰るの、何ヶ月ぶりだろうな。こんな事でも無い限り、帰られないもんな。」と、まるで離れていた恋人と会う様な感覚で、自宅を目指す秀也。

山陽自動車道に入ってコンソールの時計をちら見する。

「13時か。腹減ったな。お前にも飯を食わさないとな。」

ガソリンスタンドが有る小谷サービスエリアまで40km。

調子良く走れば20分で着く。

志和ICを越えた時、携帯電話がブルブルと震えた。

彼は、車に取り付けたハンズフリーマイクに向かって、「もしもし、沢野です。」と、話しかける。

「沢野君か。設備管理部の羽田坂です。」と、スピーカーから返事が返って来る。

「羽田坂さん。お久しぶりです。」

「昨夜の話は聞いたよ。今朝、筆頭係長から出て来るな！って、怒鳴られたんだってな。」

「仕方が無いと思っています。慣れた作業員ばかりだったから、指示を出さなかった自分の責任です。こちらから辞表を提出しようか。と、思っていました。」と、秀也は、今の自分の心境を話す。

「おいおい、早まるなよ。誰も辞めろ。とは言わないし、辞表なんか受け取らないぞ！！」と、羽田坂の大声がスピーカーから出てくる。

「でも、僕が指示をしなかった・・・」

秀也の言葉が終わらない内に、「もう良い。その話は済んだ。」と、羽田坂が吼えた。

「お前は働き詰めで疲れていたんだ。だからボンミスを起した。お前に特別休暇を与える。これは

会社の重役会議なんかの処分結果じゃない。マスター直々の決断だ。何日でも好きなだけ休め。勿論給料は出す。と、言ってくれている。明日から必ず会社に電話して休暇願いを出せ。電話が無い時は、引き摺ってでも会社に出勤させてやる。良いな。分かったな。返事は？」と、羽田坂が一方向的に叫えまくる。

「羽田坂さん。ありがとう。マスター・・・いや、社長にお礼を言っておいて下さい。」と、秀也が謙虚に言う。

羽田坂が「ああ、言っておく。お前も、一発目に出勤して来たら、真っ先にマスターに会いに行け。」と、言って、電話が切れた。

暫くの間、羽田坂の大きな声が秀也の耳の奥で木霊していた。

小谷SAで食事と給油をした秀也は、220km先に有る、実家を目出して愛車を走らせる。

「腹が満腹になったから、元気になっただろ？しっかり走ってくれよ。」

時間は15時を少し回ったところ。

秀也は、欠伸をしながら、「山間部は同じ様な景色が続くから眠気が来る。眠気覚ましに少し出すかな？」と、呟きアクセルを踏み込む。

“グオオオ……”と、マフラーから吹き出る排気音に呼応される様に、愛車が一気に加速し、前を行く車を牛蒡抜きに追い抜いて行く。

暫く行くと、爆音族の様に数台の車が、2車線の道路をチンタラとジグザグ走行しながら、他の車の行く手を塞いでいるのが見えた。

秀也は一言、「相棒。一丁噛ましてやりますか？」と、言って、思いっきりアクセルを踏み込む。

爆音族とは何の関係も無い車は、申し訳無さそうに道を譲ってくれる。

意気揚々と族の真後ろに急接近して、大音響のホーンを思いっきり鳴らす。

それでも道を空けずに、“やれるもんならやってみろ”状態で走る族共。

仕方なく、族の最後尾にくっ付いて走っていると、5台の大型デコトレイラーが秀也の愛車の横に走って来た。

先頭のトレイラーが、電子ホーンを思いっきり鳴らし、最後尾を走っている族の車に、大型バンパーを最接近させる。

秀也はアクセルを緩め、減速して5台のトレイラーの後ろに着く。

2台目のトレイラーが追い越し車線に入り、先頭のトレイラーの真横に並び、電子ホーンを響かせる。

次いで、残りの3台のトレイラーもホーンを鳴らす。

これには爆音族も恐れをなしたのか、全車が加速して逃げ出したらしく、5台のトレイラーも速度を上げて走り出した。

5台のトレイラーは、走行車線に一列に並んで、後ろから来る車に進路を譲って行く。

秀也は、彼らに敬意を表し、“ポンポン”と、ホーンを軽く鳴らして追い抜く。

トレイラーのドライバーもホーンを鳴らして見送ってくれた。

「さて、爆音族はどこへ行ったかな？」と、秀也が呟いていると、300mくらい先を他の車から追い駆けられる様に、猛スピードで走って行くのが見えた。

秀也は、「最初からその速度で走っていたら、トレイラーに追い掛け回されなくて済んだのに。」と、族に対して、思ってもいない哀れみの言葉を吐く。

途中のハプニングの為に、減速を余儀なくされた為、また眠気が襲って来た。

「早く次のSAに入って仮眠しよう。」と、言って、アクセルをベタ踏みにして愛車を走らせる秀也。

とんでもない速さで前方の車に接近する秀也の車。

驚いて道を譲ってくれたドライバーが、横目で秀也を睨んでいるのを見逃さず、「俺が頼んだ訳でも無いのに、あんたが勝手に道を譲ってくれたんだろ？そんなに睨むなよ。」と、秀也が言いながら

軽く追い抜いていく。

1時間程、その速度を維持しながら走っていたが、流石に足が疲れて来た。

走行車線に移動し、アクセルを踏み込む足の力を緩めて減速させる秀也。

先程とは打って変わって、のんびりモードで走行していると、後方から爆音が聞こえて来た。

最新のモンスターマシン、ランボルギーニ・アベンタドールが、追い抜き車線を爆音を轟かせながら猛スピードで駆け抜けて行く。

秀也は、追い抜かれる瞬間、アベンタドールのドライバーの顔をちら見し、「相手にするな。眠気がピークの時は危険だ。」と、言って愛車を宥める。

「あと少しで瀬戸パーキングエリアか。ここで仮眠しよう。」

暫く走ると瀬戸PAの入り口が見えて来た。

秀也の愛車は入り口に吸い込まれる様に、PAに入って行った。

瀬戸PAにて仮眠していた秀也は、ふ。と、目が覚めて、フロントガラスから外を見る。

「暗い。今、何時だ？」

腕時計を見る。

「20時。こんなに寝てしまったか。相当疲れてたんだな。僕。」

まるで他人様の様に言って、愛車のエンジンをかける。

「夜に聞くお前のエキゾーストサウンドは最高。」と、言いながら、アクセルを踏み込む。

我が家が有る加古川まで、距離100km弱。

「早く風呂に入りたい。」

仮眠し、体が軽くなった秀也は、愛車のアクセルを容赦なく踏み込む。

前を走る車に向かって、「お先に！！」と、愛想よく声をかけて追い抜く秀也。

山陽姫路東ICから播但連絡有料道路に入り南下する。

姫路JCTから姫路バイパスに抜け、加古川ランプを降りる。

「さあ、ここまで来れば、もう家に着いたも同然だぞ。」

大通りから住宅街の中に車を乗り入れる。

網の目の様な道路を左右に曲がりながら、ゆっくり出きるだけ静かに走って行く。

暫く走ると、秀也の目に高層マンションが飛び込んで来た。

「おお、久しぶり。泥棒に入られて無いだろうな。」と、大声を上げ、愛車を駐車場に入れる。

荷物を抱え、エレベーターに乗り込む。

最上階に着き、突き当たりの部屋に向かう。

ドアを開け中に入り、「やっと着いたぞ！」と、秀也が大声で叫ぶ。

完璧な防音壁と耐震構造のマンションだからこの程度じゃビクともしない。

適当に荷物を置き、風呂に湯を入れる。

風呂が溜まる間、ベッドルームに向かう。

「1人暮らしじゃ勿体無いが、贅沢も必要だ。」と、言って、大金を叩いて購入したダブルベッドが、主が横になるのを待っていた。

「ただいま。」と、言うなり、ベッドにダイビングする秀也。

クッションが効いたベッドがバフッ！！と、音を上げ、秀也を優しく受け止める。

「湯が溜まるまで寝よう。」と、言って目を瞑る。

10分後。

「お風呂が沸きました。」と、風呂場から電子音声が届く。

ゆっくり体を起し、風呂に向かう。

約30分後。

風呂から出た秀也は、冷蔵庫から1ヵ月以上冷やしたままの思いっきり冷えた缶ビールを、一気に飲み干す。

「冷て~~~~」と、吼えた後、もう一本鷲掴みにして、ベッドルームの隣にあるシアタールームに向かう。

巨大な液晶モニターとスピーカーシステムが何とも言えない高級感を醸し出している。

幾ら完璧な防音壁と言えども、このシステムの大音響には勝てない。

「一度、お隣さんから苦情が来たからな。これだけは宝の持ち腐れだな。」と、中程度の音でニュースを見る。

「明日は天気良さそうだな。久しぶりに列車に乗って美味しいもんでも食いに行くか。」と、本棚から、るるぶを引っ張り出す。

「何ヶ月も前の本だけど、店のメニューは然程変わらんだろう。」と、言いながら、美味しそうな食べ物を探す。

だが、それも束の間、ゆっくり風呂に浸かって、眠気に襲われた彼は、モニターの電源を切り、隣のベッドルームに向かう。

「おやすみ。」と、言って、ベッドに包まれた彼は、あっ！と、言う間に眠りに落ちた。

次の日の朝6時。

部長との約束通り、会社に休暇届けを出した秀也は、スーツに身を包み、徒歩でJR加古川駅へ向かった。

秀也編の続きは、別冊『天の川に願いを込めて』に続きます。

僕には、親しい友人がいた。

その人とはブログサイトで知り合った。

最初はお互いのブログを読んで、コメントをする間柄だった。

その内、2人はブログサイトが出した通信ゲームに嵌った。

1年が過ぎた頃、彼女が突然、僕の目の前に現れた。

「一緒に本を作ろう。」

わざわざ、その事だけを言い、彼女は6時間も掛けて僕に会いに来た。

最初は、お互いが書いた本を読み合いしていた。

暫くして、共同名で合作の本を出した。

そうこうしている内に2年が過ぎた。

もう良いやろ。

相手の長所も短所も見飽きた。

3年前みたいに、時々、相手のブログを読んで、コメントするだけのブログ友に戻ろう。

その方が、普通に話せる。

僕も自然体で居られる。

昨日、相手に僕の心の中に溜まっていた事をぶちまけた。

そして、通信が終わった後、パートナーを解除する事を選んだ。

3年間ありがとう。

そして、さようなら。